ハッピーカモーン

花村かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハッピーカモーン

【Ｎコード】
Ｎ８９１７Ｘ

【作者名】
花村かおり

【あらすじ】
初恋の淡い気持ちを思い出した男性が、彼女を想いながらも、彼女の幸せを願い…
全２４話。毎日連載を更新します。

ハッピーカモーン　1

平日の夕方前のまどろみがちの時間帯、拓也のコーヒーショップのお客は決まってまばらになる。常連客の老人が2、3人いる程度だ。

「浜本くん、休憩に行って来ていいよ」と大学生のアルバイトの浜本くんに声をかけると「はーい」と大きな声が返ってきた。浜本くんは店のエプロンをはずすとそそくさと店を出て行った。

大方、近所のナツカワベーカリーにパンでも買いに行くのだろうと拓也は想像した。浜本くんは時折、近所のナツカワベーカリーで働く女子学生の入江さんについて、拓也に話すことがあった。入江さんってネームプレートだけで話したことはないんですけど、目がパッチリしていてすごく可愛いんですよ、しかも、「ありがとうございました」という声も笑顔もめちゃくちゃ可愛いんですよお、などと雑談を持ちかけてくる。

拓也は「とっとと、愛の告白でも何でもしてこい」とぶっきらぼうに答えるのだが、「はあ、店長には僕の恋心がわからないんですね」などと可愛げのない答えを返してくる。なるほど、恋をしている当人にとっては、自分の気持ちを伝えるのさえも勇気がいるし、最悪、その結果、相手に拒否されてしまうこともあり得るのだ。

拓也は高校時代、陸上部に所属していた。陸上はいろいろな競技があるから、団体での練習というのは少なく、その競技ごとのメンバーで練習をすることが多かった。拓也はハードルを専門としていた。ハードルを選んだ部員は3名と少なく、その3名で毎日、ハードルを並べて練習していた。

拓也と田中くんという後輩と、もう一人は同級生の山本奈々子という女子だった。3人で練習方法を考えたり、互いにフォームの確認をしたり、今思い返せば、高校時代は授業を抜かせば、3人でいる

時間が一番多かったような気がする。高校の部活は一学期に3年生は引退する。そのあとは受験勉強をせよという高校の方針なのだ。

その部活の最後の日もいつもと違わず、ハードルを3人で倉庫に片付けをしていた。後輩の田中は、これからは一人で練習しなければならないと泣き言を言っていた。拓也は「引退してもたまには来るから」と田中くんをなぐさめた。

ハードルを倉庫に片づけたあと、奈々子は、何か拓也に伝えたいことがありそうな顔をしていた。拓也は「今までありがとう」と彼女に言った。彼女はなにも言わず拓也の手を握り、そして耳元で小さな声で何かをささやいた。しかし、拓也は聞き取れず「え？」と聞き返すと「ありがとう」と今度ははっきりと聞こえる声で彼女は言葉を返した。

彼女の最初の言葉は何だったんだろう。拓也は彼女に尋ねられぬまま、その場から彼女は去っていった。拓也は奈々子に密かに恋心を抱いていたのだったが、それっきりだった。

ハッピーカモーン　2

浜本くんの恋心もそれくらい淡い繊細なものなのだろう。三十七歳の拓也にはもう、その気持ちは思い出せない。

そう、思いふけっていると、休憩に出かけたはずの浜本くんが扉を開けて戻ってきた。少し息を切らせて。

「て、店長！お客様です！」と浜本くんはあわてた声を出していた。拓也は浜本くんの動作はおかしいと感じたが、いつもどおりに「いらっしゃいませ」と声をかけていた。

拓也の目の前にはまさしく今、思い出にふけっていた奈々子がいた。

浜本くんが拓也の耳元で「夜にやっているニュース番組のキャスターの山本奈々子に違いありませんよ」と少し上気した声でささやく。

拓也は「ちがうよ、俺の高校時代の同級生だよ。確かに山本奈々子にそっくりだが、別人だ」と冷静を装って、浜本くんに答えた。

浜本くんは彼女の顔をチラッと見ると、いぶかしげな顔をしていた。拓也は出来る限り、普段どおりの自分を装い、「浜本くん、悪いけどさ、休憩もうちょっと後にしてくれるかなあ」と頼んだ。

「まあ、別にいいですけど…」と浜本くんが答えると、ちょうど精算のお客様がいたので、浜本くんはレジに立った。

奈々子は「拓也、ひさしぶり、１０年前の同窓会ぶりかしら」と笑顔で拓也に話しかけた。

拓也は「まあ、ここじゃ、なんだから」と言って、二階の休憩室に奈々子を引き入れた。

拓也のコーヒーショップの２階は寝泊りも出来るよう、住居スペースになっている。最初に店を立ち上げた当時は、拓也はこの二階で暮していたが、結婚して子供も出来、手狭になったこともあり、住まいは別に借りて、今はもっぱら休憩室として使っていた。

「突然、こんな有名人が店に来るなんてさあ、店のアルバイトが興奮しちゃうよ、まだまだ多感な大学生なんだから」
と拓也は切り出した。
「ああ、ごめん、ごめん。メイクもキチンとしていないし、普段着だし、ばれないと思ったのよ」と奈々子は言った。確かに洋服はパーカーにジーンズというラフな格好であったが、髪形もメイクもキチンと整えられていた。
「それで、今日はどうしたの？」と拓也は奈々子に尋ねていた。
「拓也ってワイドショーとか、見ないの？」と奈々子は逆に尋ねてきた。
「うん、あんまりね。章子はしょっちゅう見ているみたいで、時々聞いたりするけどね」
章子は拓也の妻のことで高校の同級生でもあり、奈々子とも旧知の仲であった。
「じゃあ、拓也は私がどうなっているなんて知らないのね？」
「どうかしたの？」と拓也は自然に聞いていた。
「ちょっと待ってね」と言って、奈々子は1階の店内にあるスポーツ新聞を持ってきた。そして1面の記事を指差して、
「これ見てよ」と言った。
《山本奈々子キャスター、マンションの階段から転落し骨折。全治2ヶ月。突然の番組降板。》
「なんだ、こりゃ？」と拓也は声をあげていた。そして、奈々子の身体を上から下まで見てみるが、骨折しているようには見えない。
「どういうことなんだ、これは？」
「これはね、世間を騒がせないためのカモフラージュ」と奈々子は人差し指を唇に当てて言った。
「十分、世間を騒がせているぞ」と拓也は新聞を持ち上げて、記事を念入りに読み始めた。
「降板の本当の理由は、階段から転落じゃないの、これ！」と奈々子が前髪を上げると、額に7センチぐらいにわたる大きな傷が現

れた。

ハッピーカモーン　3

「どうしたんだ、何があったんだ？」と拓也はますます混乱した。
「どうも、こうも、ないわよ。でも私が悪いんだけどね」と奈々子は俯いた。
「私ね、番組のプロデューサーと不倫していたのよ。最初は単なるはずみでね。その人も相当な女好きって知っていたし、一回きりって思っていたの。それが、一度が二度になり、知らず知らずのうちに腐れ縁みたいになっちゃって、定期的に会っていたのよ。だからと言って特に相手に特別な愛情があったわけじゃないわ」
「それが、どうしてそんな傷を負う羽目になったんだ！」と拓也は興奮して奈々子に聞いた。
拓也を制するように落ち着いた口調で奈々子は話し始めた。
「私のマンションで彼といつものように会っていたの。そこに奥さんが乗り込んできて、ナイフで私の額を切りつけたのよ」と言うと、フウッと奈々子はため息をついた。
「でも彼は、そんな状況もなれているみたいでね、直ぐに知り合いの美容外科の先生に電話をして、病院に連れて行かれて、直ぐに病院で処置をしてもらったわ。命にも別状はないし、傷も2ヶ月もすれば、わからなくなるだろうって」
「下手すりゃ刑事沙汰じゃないか」
「まあね、でも職業柄スキャンダルはご法度なのよ。告訴はしないわ。そういうわけで、階段から転落。骨折ってことになったのよ」と奈々子は言ってから、拓也から新聞を取り上げた。
「これで番組は降板。しばらくの間、山本奈々子は業界から抹殺されたわけ」と奈々子は弱弱しく言った。
「随分…、大変なことになっていたんだな」と拓也はそれ以上、声を出せずにいた。
「プロダクションからはね、しばらくの間は休業って言われてい

るけど、これを機にテレビ業界から、ほされてしまうかもしれないわ」

「うん、まあ…。奈々子の心配する気持ちはわかるよ。でも結果としてこうなってしまった以上、おとなしくしていたほうがいいんじゃないか？今まで人気キャスターとして引っ張りダコだったわけだし、この際、休養も必要なんじゃないか？君の華々しいキャリアを持ってしてみれば、仕事は選ばなければあるんじゃないか？」

「仕事を選ばなければねえ…」

今まで有名番組のメインキャスターを張ってきた奈々子にとって見れば、仕事のランクを落とすのは屈辱でしかないことは拓也にはわからないのだ。そう思って、奈々子はため息をついた。とはいっても、　拓也の言うとおり、ここでじたばたしても始まらないことはわかっていた。

「人生いろいろあると思うけど…。俺から見れば、奈々子は最短コースを転びもせず、ベストタイムでたどり着いたように見えるよ。でも、実際はさ、俺の知らないところで遠回りをしたり、寄り道をしたりしているのかもしれない。それで今に至るわけだし。とにかく今、焦らなくても」と悩んでいる風に見える奈々子に向けて、拓也は言葉を選んで言った。

「今度は急に行き止まりになっちゃった…」

「人生には無駄になることはないよ。行き止まりになったら、そこで何かを見つけることもあるかもしれないんじゃないかな？」と拓也は奈々子を慰めるようにして言った。

ハッピーカモーン　4

「でも、今は何をしたらいいかわからなくなっちゃって…」と奈々子は頬杖をついて言って、そして続けた。

「ねえ、拓也。このお店始めてから、どれくらい経つの？」と奈々子は拓也に尋ねた。

「俺が三十歳のときに店を立ち上げたから、もう七年も経つね」と拓也はそういえば…そんなに経つのかと思いながら答えていた。

「高校時代の拓也と、コーヒーなんて想像もつかなかったけど」

「そうねえ、俺がコーヒーにはまったのは社会人になってからだよ。一人暮らしのアパートの近くに古いカフェがあってね。なんか、陰気くさい店で、初老の男性がオーナーでね。客層も老人ばかりでさ。でもコーヒーは本当に旨くてさ。その店は朝の7時半に店を開けるんだけど、毎朝、目覚ましにコーヒー飲んでいたよ。それからかなあ、コーヒーショップを出そうと思い始めたのは」と拓也は昔を思い返して言っていた。

「拓也はどちらかっていうと、陸上部のハードルバカで、味覚にはこだわりがなさそうなタイプのように思えたわ」と奈々子はいたずらっぽい顔をして言った。

「ひどい言いようだな。じゃあ、俺の特製のブレンドコーヒーを飲んでみてよ」と言って拓也は一階の店舗に向かい、店長おすすめブレンドコーヒーを淹れる準備を始めた。コーヒー豆はその日によって違うが、拓也が一番好みの豆を三種類使って、豆を粗挽きする。そして、ネルフィルターを設置したサーバーに挽きたての豆をいれ、ゆっくりと湯を注いでいく。ゆっくりゆっくりコーヒーが滴り落ちるこの瞬間の香りが拓也にはたまらない。そのコーヒーを二階の奈々子に運んでいく。

「おまちどうさま」と拓也はテーブルの上にコーヒーを置いた。奈々子は一口飲み乾すと「おいしい！」と感嘆の声をあげた。

「ふふふ、そうだろ、そうだろ」と拓也は少しばかり得意げになった。

「拓也にこんな才能があるとはねえ。時代は変わるもんだ。」と奈々子はきょとんとした顔をして言った。

ハッピーカモーン　5

「そうだ、章子は元気にしているの？」と奈々子は同じ高校の同級生であり、拓也の妻である章子のことを尋ねていた。
章子は陸上部ではなかったけれど、当時から拓也のガールフレンドでもあったから、奈々子と章子も親しく付き合っていた。
「あの章子も二児の母だぜ。昔から気が弱いほうではなかったけど、年を経るほどに気が強くなってさ、ＰＴＡとかで、ずけずけ言っているらしいよ」
「母は強し…かな？」
「まさしくだよ。今は下の子が３ヶ月前に生まれたばかりなんだ。いつもは章子に店も手伝ってもらっているんだけど、それどころじゃなくてさあ」と拓也は奈々子に不満を漏らしていた。
「へえ、じゃあ、お店、人手不足なの？」と奈々子は尋ねていた。
「うん、まあね。でも混む時間も限られているし、アルバイトの浜本くんもいるしね」
「ねえ、２ヶ月間だけ、私を雇わない？」と奈々子はとんでもないことを言い出した。拓也は唖然とした。
「そりゃあ、店を手伝ってくれるのはありがたいけどねえ、あの山本奈々子がここにいるなんて知れわたったら…」
「大丈夫よ」と奈々子は不適な笑みを浮かべた。
奈々子はバックから黒い髪留めと黒縁メガネを取り出した。くるくるっと長い髪をまとめるとメガネをかけた。
「ほら、別人でしょ？」と奈々子はウインクをして見せた。
確かにこれで店のエプロンでもしてみれば、まさか山本奈々子と同一人物とは思うまいという風貌になった。
「私、学生時代、ウエイトレスのアルバイトをしていたの。コーヒーを淹れるのは出来ないけど、接客は任せてよ」
奈々子は続ける。

「それに、アルバイト代はいらないの。ただし条件がある」
「何？」と拓也はごくりと唾を飲み込んだ。
「このコーヒーショップの2階に住まわせてもらいたいの」
「えっ？」と拓也はますます驚いた。
「自分のマンションに帰ると、またあの男が来そうで嫌なのよ」
「はあ、そういうことか…」
拓也は呆然としていた。好きでもないプロデューサーのせいで傷を負った上に、自分のキャリアも奪われ、それでも、なお付きまとわれている奈々子を哀れに思ったからだ。
「まあ、俺はいいけどさあ。章子に相談しないとまずいだろ。バイトが勘違いして、俺が女連れ込んでいるなんて、噂でも立てられてみろ。今、章子に電話するよ」
拓也は携帯電話で章子に電話をかけた。
「ああ、俺。今、奈々子が店に来ているんだよ。奈々子って？陸上部で一緒だった。ああ、高校の同級生の。嘘じゃねえよ。ああ…、とにかく由香を連れて来いよ。そうしたほうが、話が早いや。待っているぞ」
拓也は章子に奈々子が来ていることを信じてもらえずイライラしているようだった。
「まったく、あいつは『奈々子があんな地味なコーヒーショップに来るわけないじゃない』なんていうんだぜ。地味で悪かったなっ、つうの！」
「あら、落ち着いた感じの素敵なコーヒーショップだと思ったわよ」と奈々子はフォローする感じでもなく、きょとんと言った。
「だろ！わかる人にはわかるのだよ。この良さが」と拓也は目を輝かせて言った。その様子をみて奈々子はふきだした。
「拓也はよっぽどこのお店を愛しているのね」と涙を流しながら笑い、ハンカチで涙をぬぐいながら言った。

ハッピーカモーン　6

章子はタクシーでも使ったのか、１０分もせずに、赤ん坊の由香を抱いて章子がやってきた。

「奈々子！」と章子は一声をあげ、由香を拓也に預け、菜々子の両手を握っていた。

「心配したのよ。階段から転落して全治２ヶ月なんて。今日は松葉杖で来たの？」と章子は大真面目に気の毒そうな顔をして奈々子に尋ねた。

「ああ、あれ、嘘なのよ」と奈々子はさらりと言って、座っていた椅子から立ち上がって見せた。

「この通り、なんでもないの。でもね…」と先ほど拓也に見せたように前髪を上げて、傷を章子に見せた。

「どうしたのよ、その傷！」と章子が問うので拓也に説明したのと同じように説明をした。

「全く、そのプロデューサーってとんでもない男ね！」と章子は怒った顔で罵った。

「まあ、それで、甘い汁を吸っていたのも私よ。自業自得なのよね。でもね…、その男がまた私のマンションに来そうで怖いのよ。そこでね、このカフェで働きながら、２階に住まわせてもらいたいと思っているのよ。それをさっき拓也に相談していて。章子の了解がないと駄目だって」

章子は少し思案した後に、

「いいわよ、ねえ、拓ちゃん。キッチンもシャワーもあるし、ただし洗濯機はないから、どこか別のところで洗濯してもらう必要があるけど」

「わかったわ。洗濯は週１回まとめてマンションでするから」

「それと、拓ちゃんの仮眠用の布団があるから、それで良ければ使ってちょうだい。嫌だったら悪いけど、持参してきて」

「その布団貸してくれる。とてもありがたいわ」
「ええ、もちろんよ」
女二人の会話は盛り上がり、拓也の出る幕がなくなった。
「じゃあ、奈々子は、昼間は変装して、アルバイト。夜はここに寝泊り。さて、浜本くんが休憩に行けないから、俺は仕事に戻るぞ」と言って、由香を章子に戻してから階段を下りていった。
「浜本くん、悪かったな、今度こそ休憩に行って来ていいぞ」と浜本くんの肩を叩きながら言った。
「店長…」と浜本くんは言うと、拓也の耳元でささやいた。
「あの女の人。絶対、山本奈々子でしょう。首筋のホクロまで一緒なんだもん」
「むむ…」と拓也は答えられないでいた。
「店長の高校の同級生にあんな有名人がいるとはねえ…」と浜本くんは不敵な笑みを浮かべていた。
「まあ、とにかく休憩行ってきますよ。今日のパンは何にしようかなあ」と浜本くんは能天気に店を後にした。

ハッピーカモーン　7

拓也の店は夜２０時に閉店する。アルバイトの浜本くんは後片づけを終えると大きな声で「おつかれさまでした」と店を出ようとした。

「ちょっと、待った」と拓也は大きな声を上げた。

「何ですか、店長・・・。山本奈々子キャスターのことですか？今日、店に来たなんてほかの人に言ったりしませんよ。僕はこう見えて口が堅いんです。信頼してください」

「ああ、浜本くんのことは信頼しよう。それもそうなんだが・・・」と拓也は口ごもった。

「じゃあ、なんですか？」と浜本くんは不思議そうな顔をして尋ねた。

「実はな、彼女、明日から、ここで働いてもらうことになったんだ」と拓也はぶっきらぼうに言った。

「ええ！」と浜本くんは「え」に濁点をつけたような声を上げた。

「おーい、奈々子、来てくれ」と拓也は二階にいる奈々子に声をかけた。奈々子は「はーい」と声を出して、一階の店舗に降りてきた。

拓也はごほんと咳払いをし、

「浜本くん。君は気づいているが、こちら、キャスターの山本奈々子さんだ。俺の高校の同級生。訳あって、ここで働いてもらうことになった」と奈々子を浜本くんに紹介した。

「は、はじめまして。テレビではよく拝見しております」と浜本くんは奈々子を目の前にして、もじもじした口調で挨拶をした。

「奈々子。こちらは店でアルバイトをしてもらっている浜本くん。今、大学3年生なんだが、とても優秀らしく、ほとんど単位を2年までに取得し終わっているとのことで、週5日ぐらい、働いてもらっているんだよ」と拓也は浜本くんを褒めながら紹介した。

「はじめまして、山本奈々子です。事情あって、テレビ降板になっちゃったんだけど、しばらくここで働かせてもらうことになったの。このままだとバレちゃうから、変装して偽名を使って働こうと思っているの。偽名は『本山』なんていいかしら」と奈々子は笑いながら、浜本くんに話しかけていた。

「じゃあ、さっそく本山でネームプレート作るぞ」と拓也は言った。

「それに、しばらくの間、この店の2階に住まわせてもらうわ」と奈々子は言った。

「ぼ、僕、口堅いから、山本奈々子さんがここで働いているなんて、絶対言いませんから！」と浜本くんは拓也に言った同じ言葉を奈々子にも伝えた。

「ありがとう。心強いわ。それに昔、ウエイトレスのバイトをしていたんだけど、コーヒーを淹れるのはずぶの素人なの。ご指導よろしくね」

「そ、それはもちろん！」と浜本くんは力強い声を出していた。

「あ、あの、ちょっと、今日はびっくりしたな。と、とにかく帰りますね。おつかれさまでした」と浜本くんは興奮冷めやらぬ様子で、足早に店を去っていった。

ハッピーカモーン　8

拓也は店の戸締まりの方法を一通り、奈々子に説明した後、
「じゃあ、俺もそろそろ帰る。明日は８時前には来るから。女一人は危ないんだから、俺が来るまで、誰か来ても無視しろよ」と奈々子に用心をするよう諭した。
「ええ、わかったわ」と奈々子は口角をあげて笑顔で答えた。
「傷は痛まないか？」と拓也は尋ねた。
「うん、薬を飲んでいるから大丈夫なの」と奈々子は答えた。続けて、
「今日は拓也の布団で、拓也の夢を見るから」と茶目っ気のある顔で奈々子は言った。
拓也は頬が上気するのを感じた。
「全く大人をからかうもんじゃないよ」と拓也は答えた。
「じゃあね、おやすみ」
「おやすみ」
まるで、恋人同士の別れ際の挨拶、拓也は奈々子とのこれからを考えながら、店を出た。

次の日は朝から晴天だった。
拓也の自宅は店から徒歩３０分ほど歩いたところにある。歩いて通勤するには時間がかかるため、自転車で店まで通っている。ただし、店までの道のりの最後にかなりの勾配の坂がある。ふつうの自転車だと上りきるのがキツいため、一ヶ月まえに１０万円もするロードサイクルを購入した。章子もはじめは１０万円という値段を聞いて反対をしたが、「よく考え得たら、自動車で通勤するよりもエコよね、健康にもいいし」とあっさりＯＫを出した。このロードサイクルで上る坂道はこんな天気の良い日は最高に気持ちがいい。拓也は店の裏に自転車を止め、盗難防止のロックをかけた。そして、

いつものように、鍵を開け店のシャッターをあげると目の前に奈々子がいた。
「拓也、おはよう！」と髪を後ろに束ね、黒縁メガネをかけた奈々子が待ちかねたように声をかけてきた。
「ああ、おはよう。もう、アルバイトの変装をしているんだね」と奈々子の変装した姿をみて、拓也は少しばかり驚き、答えた。
「うふふ、今日からですもの。お店のエプロンも早くしたいわ」と奈々子は拓也に笑顔を向けていた。
「えーと、エプロン、エプロン」と拓也は店内で余っているエプロンを探していた。右奥の棚に余っていた新品のエプロンがおかれていた。赤い生地に「コーヒーショップ・ＴＡＫＵ」と店の名前がプリントしてある。
「ほい」と拓也は奈々子にエプロンを放り投げた。
奈々子がエプロンをうまくキャッチすると、拓也は「ナイスキャッチ」と声を出した。
奈々子は早速「コーヒーショップ・ＴＡＫＵ」のロゴの入ったエプロンをつけると、とても人気キャスターとは思えない単なるアルバイト店員になった。
「うふふ、なんだか嬉しいわ」と奈々子は呟いた。
「なんでだい？」と拓也は尋ねた。
「私ね、毎日、重大なニュース、悲しいニュースばかり読んで、生活の糧としていたじゃない。こうやって、お客様に奉仕する仕事って、ものすごく新鮮なの。だから楽しみで」と奈々子は昨日、拓也が作った『本山』というネームプレートをエプロンにつけながら答えた。
「とても、お似合いだぜ」と奈々子の姿を見て拓也は言った。

ハッピーカモーン　9

拓也の店は朝８時に開店する。

最初の客は、いつものように伊藤老人だった。老人と断定しては失礼だが、拓也が見立てる限り、八十歳を越えているように思えた。決まって注文するのはハムエッグとトースト、そして店長おすすめのブレンドコーヒーだった。最初のうちは拓也も注文を確かめていたが、数ヶ月すると、拓也は注文も聞かず、メニューを出すようにしていた。

奈々子は伊藤老人が店内に入るや否や「いらっしゃいませ」と大きな声を出していた。伊藤老人の座る場所も決まっているので、奈々子が別の席を案内するのではないかと拓也は冷や冷やしたが、奈々子が「お好きな席にどうぞ」と言うのが聞こえてきて拓也がほっとした。伊藤老人はドシリと定位置の席に座った。

奈々子が「ご注文は？」と尋ねると「いつものやつ」と伊藤老人は答えた。奈々子が「いつものやつですね！」と元気よく答えたものだから、伊藤老人は大笑いして、「君はいつものメニューを知っているのかい？」と奈々子に尋ねていた。「ええ、店長に聞けばわかりますから」と奈々子はウエイトレスとして、最高の笑顔で答えた。

「新しいアルバイトさんかね、元気があってよろしい！」と伊藤老人は上機嫌となった。

伊藤老人は高齢であるせいか、彼女が人気キャスターの山本奈々子であることに全く気づいていないようだった。

伊藤老人だけじゃない。ほかのお客さんも彼女の正体に全く気づかず、いつものようにリラックスしてコーヒーを飲んでいるではないか。拓也はほっと胸をなで下ろした。

１１時に決まってやってくる常連客がいる。３軒向こうの大型書店のオーナー奥山だった。書店での日常の仕事は全て社員に任せて

いるため、普段は暇なようだ。奥山は店内に入るといち早く奈々子に気づいた。
「新しいアルバイトかい？」と奈々子に親しげに声をかけていた。
「ええ、今日からなんです」と奈々子は答えた。
奥山は奈々子の顔をまじまじと見て、
「君はきれいな顔をしているね、そのメガネは似合わないよ」などと奥山はセクハラじみた発言をしていた。
「ありがとうございます。でも私、ド近眼であうコンタクトが無いんですよ」と奈々子はうまくかわしていた。奥山も奈々子の正体に一向に気づいていないようだった。

ハッピーカモーン　１０

「お疲れさまです！」と午後になると元気な浜本くんが出勤してくる。

拓也は「おう、今日もよろしくな」と答え、浜本くんは仕事に集中するというのが、毎日のこの店のパターンだ。しかし、この日は違った。

浜本くんはいつもより３０分近く早くやってきて、いつものような元気な挨拶をしてきた。

「あれ、今日は早いな？どうした？」と拓也が不思議に思って尋ねると、

「あ、いつものナツカワベーカリーでチョコデニッシュがセールだったので多く買ってきてしまいました。これ、女性にすごく人気なんですよ。山本・・・、いや本山さんと一緒にどうかなあ、と思いまして。いや、店長も一緒でもいいですけど。」とあのシャイな浜本くんと思えない下心丸見えの発言をしていた。

「わかった、わかった。あの本山さん。浜本くんが一緒にチョコデニッシュを食べたいって言っているけど」と拓也は奈々子に尋ねた。

「わあ、ありがとう。一緒にいただくわ」

と奈々子が言うものだから、拓也は奈々子に休憩を取らせることにした。

浜本くんと奈々子は「チョコデニッシュを食べながら、アルバイト同士仲良く会話をしましょう！」とニコニコしながら2階に上っていった。

拓也は二人が気になるものの、１階でしっかり仕事をせねばならない。２階で二人の笑い声が聞こえてきた。仲良くやっているようだ。拓也は何か面白くない。拓也は店の注文が落ち着き始めたのを見計らって、コーヒーを淹れて、２階に向かった。

二人は楽しそうに談笑をしてきた。
「おう、コーヒー淹れてやったぞ」と拓也が声をかけるが、奈々子が「ああ、ありがとう」と言うばかりで、一向に話をやめない。
拓也はごほんと咳払いをして、「なんか楽しそうだけど、何話しているんだ？」と二人に尋ねた。
「今、ナツカワベーカリーの入江さんのこと話していたんです。店長はあしらうばかりで何も話を聞いてくれないんですけど、奈々子さんは嫌な顔ひとつしないで聞いてくれるんです。」と浜本くんは目を輝かせて言った。
「ほおお」と拓也はいぶかしげに奈々子を見た。
「近くのナツカワベーカリーというパン屋さんにとてもすてきなお嬢さんがいるらしいわね、私もお顔を拝見したいわ」と拓也にウインクをした。
「んなの、ほっとけ」と拓也はぶっきらぼうに答えた。
「ほら、奈々子さん。店長はいつも冷たいんですよ」と浜本くんは奈々子にグチを言っていた。
「拓也は昔からそうよ、恋愛なんて興味ないんだから。それでも、ちゃっかり、彼女とかがいてさあ」と奈々子は笑った。
「そういえば店長の奥さんは高校の同級生なんですよね。あー、店長は好かれて奥さんと一緒になったんですね。だから、この僕のピュアな気持ちを理解してくれないんだ。」
「まったく、何バカなこと言っているんだ」と拓也は少しイラついて答えた。
「じゃあ、奈々子はどうなんだ。高校時代に好きな男とかいたのか？」と拓也は矛先を奈々子に向けた。
「私だって女よ。好きな男の子ぐらい、いたわよ」
「へえー、初めて聞いた。同じ陸上部の連中の一人か？」
「恋愛に興味がない人には、話さない主義なの」と奈々子は拓也ではなく浜本くんに向かって言った。
「そうですよ、僕に何でも話してください。僕は店長みたいに冷

たくないですから」と浜本くんは言った。
拓也は面白くない。俺は恋愛をしたことがない、つまらない人間か？
「まったく、お前らは俺をなんだと思っているんだ、俺は仕事に戻るぞ」と拓也は1階に降りていった。
「恋か・・・」と拓也はコーヒーを淹れながら考えていた。
（俺は奈々子を好きでいたんだよ）と拓也は心の中で呟いた。

ハッピーカモーン　11

確かに章子というガールフレンドがいたのは確かだし、章子の明るい性格や、優しさに好意を寄せていたのも確かだった。

でも、拓也が本当に心を通わせたいと願っていたのは、奈々子だったのだと思う。高校時代、教室の窓から同級生と戯れている奈々子の姿を追っては、今、奈々子は何を考えているのだろう、何をしようとしているんだろう、拓也は思い巡らせたことを思い出した。

奈々子は一緒に部活で練習をともにしている仲間であったが、何かこう、彼女の心の中はいつも読めないような感じがした。奈々子の好きなこと、奈々子が求めていること、拓也は知りたいと思ったことは度々あったが、ついぞ聞くことは出来なかった。

拓也が同じクラスメイトの章子と付き合うようになったのは、拓也が章子に告白をされたからだ。それを何とはなしに奈々子に相談したことがある。

奈々子は「ああ、章子ちゃん、私、あの子と話したことあるけど、いい子そうよ」とあっさりと答えた。それ以上は何も言わなかった。拓也は奈々子に反対してほしかったのかもしれない。焼き餅を焼かせたかったのかもしれない。それをあっさりと、認められて、拓也の心は萎んだ。それで、章子と付き合うことに決めた。今思うと、失恋だったのかもしれない。

でも、理由はどうであれ、章子とつきあい始めたのは、今とはなっては、正解ではなかったか？奈々子はその後、大学を卒業してからキャスターとして多忙を極めることになる。高校時代の拓也が想像しえなかったことだ。たとえ、奈々子と恋人同士になれたとしても、拓也のことなど構っていられなかっただろう。奈々子は拓也にとっては結局のところ高嶺の花でしかなかったのだ。

章子は短大を出た後、保育士として働いていたが、拓也が辛いときにはいつでも側にいてくれた。このコーヒーショップを立ち上げ

るときだって、反対もせず、黙ってついてきてくれたじゃないか。奈々子のことは淡い、淡い恋。自分だけが知っていれば良い。

「拓也は恋愛に興味がない」と言った奈々子の言葉を思いだし、

「今とはなっては、言えないこともあるんだよ」と拓也は独り言を言っていた。

「浜本くんがくれたチョコデニッシュ、本当においしかったわ。私もナツカワベーカリーに行ってみようと思うんだけど」と奈々子は言った。

「ええ、他にもいろいろな種類がありますから、店員さんに聞いて、いろいろ試してみても楽しいですよ。ちなみに僕のおすすめはクロワッサンですよ」と浜本くんは笑顔で答えた。

「じゃあ、クロワッサンを買ってみるわ」

「それに、店内で食事ができるんです。コーヒーはうちのに劣りますけど、席もわりと広くてノンビリできますよ」と浜本くんは答えていた。

「じゃあ、休憩時に行ってみるわね」と奈々子は待ち遠しそうな顔をして答えていた。

ハッピーカモーン　12

しばらく経ったある日の午後、いつものように「ただいま」と奈々子の元気な声が店内に鳴り響いた。菜々子が休憩から戻ってきたのだ。

「今日はお客さんをつれてきたの！」と拓也にウインクをして見せた。お客さんは小柄でショートボブの可愛らしいお嬢さんだった。ナツカワベーカリーのエプロンをしている。

「い、入江さん？」と浜本くんは驚いていた。そうか、彼女が入江さんか。浜本くんが好きになるのも無理もない、と拓也は思った。目のぱっちりとしたお人形さんのような顔をした可愛らしい女性だった。

「あ、浜本さん。いつもお買い上げありがとうございますね」と入江さんは少し照れくさそうに浜本くんに声をかけていた。

なんだ、すでに二人は名前を知っているぐらいの仲なんじゃないか。拓也は浜本くんが一方的に入江さんの名前を知っているだけなのかと思った。確かに浜本くんは店のエプロンをつけたまま休憩に行くので、ネームプレートで入江さんが浜本くんの名前を知ることはできるだろうが、単なるお客さんというだけでは記憶にとどめないだろう。浜本くんは浜本くんなりに、ナツカワベーカリーに定期的に通うことで、彼女と徐々に親しくなっているということだろう。

「このコーヒーショップ、来てみたかったんです。それで浜本さんと同じエプロンをした本山さんがお店に来られたので、お話をしたら、是非立ち寄ってきてくださいと言ってくださったので」と彼女は照れくさそうな顔をしていた。

「ささ、どうぞ」と浜本くんは素早く、カウンターの席に案内をしていた。浜本くんがメニュー表を渡すと、入江さんは丹念にページをめくった後、

「メニューにはいろいろな種類のコーヒーがありますけど、私、

コーヒーには疎くて・・・。お勧めありますか？」と浜本くんに声をかけていた。
「店長おすすめブレンドコーヒーはおいしいですよ。店長が独自に豆を選んでブレンドして、どんなお客様の口にもあうようにしているんです」と浜本くんは言った。
「いいことを言うねえ」と隣で聞いていた拓也は少し機嫌が良くなった。
「じゃあ、それで！」と入江さんは元気な声で答えていた。
浜本くんはいつもの手順でブレンドコーヒーを淹れていたが、拓也から見るといつもより念入りに丁寧に気持ちを込めているように見えた。いいねえ、若いって。拓也は心の中でルルル～とハミングをした。
浜本くんは心を込めてつくったブレンドコーヒーを入江さんに差し出した。
入江さんはブレンドコーヒーを一口飲むと「おいしい！」と声を上げた。
そうでしょうとも、俺が独自に研究して完成したブレンドコーヒーなんですから、と拓也はまたもや心の中でハミングした。
「うちのお店にもコーヒーありますけど、やっぱり専門店は違いますね」と入江さんはしみじみと言った。
「お店も静かだし、今度からここで、学校の課題でもしようかしら」と入江さんは言っていた。

ハッピーカモーン　13

「入江さんはどこの大学に行っているんですか」と浜本くんはすかさず聞いた。拓也は浜本くんの素早さを意外に感じていた。なんだ、俺が出る幕もなく、勝手に仲良くやっているじゃないか。俺よりも数段、女性に対しては積極的じゃないか。

奈々子は二人の様子を伺うわけでもなく、淡々と別のお客様の接客をしていた。

拓也はカウンター内で二人の会話を盗み聞きしていた。内容を要約すると、入江さんはこの近くのK大学の英文科に通っている。（かなり優秀な大学だ。）現在、2年生。将来は英語の先生になりたいので、履修項目がかなり多いらしい。その合間にナツカワベーカリーでアルバイトをしているのだが、勉強やらアルバイトやらで、なかなか自由な時間がとれない。そんな内容だった。

「じゃあ、このお店は大学からもナツカワベーカリーからも近いから、少し時間ができたら、勉強にでも、骨休みにでも来てくださいよ」と浜本くんは言い「僕は週5日の午後はここにいますので」としっかり自分をアピールしていた。

「じゃあ、是非、これからは利用させてもらいますね」と入江さんは笑顔で言った。

ふむ。案外、二人は気が合いそうだし、うまく行くかもしれないなあ。若いっていいなあ。拓也はまたもや心の中で呟いた。

ひとしきり会話が弾んだ後、「お店に戻らなくちゃ」と入江さんが言って、「また来ますね！」と元気な声で店を出ていった。浜本くんも負けじと「また来てくださいねえ」と声をかけていた。

入江さんが帰った後、「今度はデートにでも誘えそうな雰囲気だったな」と拓也は浜本くんを茶化した。

「また、店長は。僕をからかってばかり」と浜本くんは口では不満を言っていたが、横目で見る浜本くんの顔は真っ赤になっていた。

ハッピーカモーン　１４

窓の外の桜を眺めていた奈々子が拓也に話しかけてきた。
「拓也！この通りの桜の木が満開ね。さっき歩いてきた時、とても綺麗だったわ」と奈々子は目を輝かせて言った。
「ああ、今日が一番綺麗かもしれないね。明日になると、花びらが散り始めるよ」と拓也も窓の外を見ながら言った。
「お店が少し空いたら、浜本くんにお店頼んで一緒に花見見物でもしましょうよ」
「ああ、いいね、そうしよう。浜本くん、お店頼んでいいかな」拓也は浜本くんに訪ねた。
「僕はいいですよ、いってらっしゃい」
浜本くんは、入江さんがこの店にやってきたこともあって、すこぶる機嫌が良いようだった。きっと、拓也や奈々子と桜見物をするより、入江さんとの桜見物を想像しているに違いない。

奈々子とこうやって、一緒に仕事をしていると、忘れかけていた高校時代の思い出がふとよみがえって来るものだ。
高校2年生の春のある日のことだった。田中くんがまだ一年生で陸上部に入部していない頃。拓也も奈々子も前週の地区予選に出場していた。それまで地区予選のために練習に練習を重ねていて、全国大会にいけるようなタイムが練習では出ていたのだ。しかし練習のようには行かず、良い成績が出せなかった。それだけに二人はひどく落ち込んでいた。そんなわけで二人は練習を放棄した。高校へ向かう通学路は川沿いにあり、そこにはたくさんの桜の木が植えられていた。練習をさぼって桜を見に行こうじゃないかと、二人のどちらかが誘った。たぶん誘ったのは拓也だったような気がする。
桜は満開を過ぎて桜吹雪となって、あたりに美しい花びらを散らしていた。

奈々子は木を見上げて「きれいだね」と言ったその瞬間、拓也は桜だけでなく桜を見上げている奈々子がきれいだと思った。でも純情だった16歳の拓也とって口には出せないことだった。拓也も「本当にきれいだ」とだけ言った。

桜の木の下には沢山のタンポポも咲いていて、拓也はタンポポの花畑に敷物も敷かず、寝ころんだ。タンポポだけでなく、クローバーや他の草花が生えていたから、拓也のトレーニングウェアは土などで汚れたりはしなかった。

「こうやって寝転んで見上げてみると、大粒の雪がふっているようだぜ」と拓也が言うと、奈々子も拓也のまねをして寝ころんだ。

「ほんと、きれい」と言ってから、奈々子は拓也の方にゴロリと向きをかえた。

奈々子の整った美しい顔が拓也の顔に近くなったものだから、拓也は顔を赤らめた。そんな拓也の様子に気づきもせず、奈々子は会話を始めた。

「もうさあ、練習さぼっちゃって、毎日こうしてのんびりしようか？」と奈々子は少し苦い顔をして言った。

「そうだなあ、でも、そんなことしたら笠原に絞られるぞ」と拓也はのんきな声で答えた。笠原とは陸上部の担当教諭だった。数学の教諭だったが、学生時代はマラソンの選手で、それなりに良い成績を残したそうだ。（彼、曰くだが。）そんなわけで笠原は部活動に熱心だった。

「笠原なんて、ハードルなんて、たいして教えてくれないじゃない。力を入れているのなんてマラソンだけじゃない。私たちがいなくても気づかないわよ」と奈々子は答えた。

「それも、そうだなあ」とまたしてものんきな声で拓也は答えた。そうだなあ、そうだなあ。奈々子と一緒にこうやって、のんびり会話したり、デートみたいでいいなあ、なんて拓也は思ったりした。でも部活をさぼったのは、この1日だけで、次の日から二人ともきちんと練習に参加した。

奈々子はあの日のことを覚えているだろうか？俺は少なくとも桜の木の下の君に恋していたんだぜ。奈々子は俺の気持ちなんてちっとも気づいていないんだ。

「まあ、いいさ」と拓也は独り言を言って、「じゃあ、二人でデートとしゃれ込みましょうか」と奈々子に向かって答えていた。

ハッピーカモーン　15

コーヒーショップ・ＴＡＫＵのある通りは「桜通り」と名付けられており、桜の季節になると、通りの両端に植えられた桜の木が花をつけ、薄ピンク色の桜のアーチを作る。この桜を見物するために遠方からやって来る客も沢山いる。この日は平日だったが、それなりに人があふれていた。

「すごい、こんな綺麗な桜の風景はなかなか無いわよ」と奈々子は少し興奮したように言った。

「そうさ、俺はね、この桜並木を見て、あの店舗を借りたのさ」

「お店からも桜、見えるものね」と言ってから、「こんな日はコーヒーに桜の花びらを浮かべたら粋ね」と奈々子は言った。

「うむ、季節限定、桜コーヒーだね。伊藤老人なんかは喜びそうだな」と拓也は答える。

「ねえ、拓也。覚えている？」と奈々子は拓也に尋ねた。

「何を？」

「高校の通学路にあった桜並木」

「もちろん覚えているよ」

「一度だけ、部活さぼって桜を見に行ったよね」

「ああ、覚えているよ。あの日は地区予選で敗退して、二人とも、やる気をなくして、部活をさぼったんだ」

「そうだったね」と奈々子は頷き、「あの桜も綺麗だったね」と呟いて、それきり、その話題はしなかった。

ついさっき脳裏にふと浮かんだ、拓也も忘れていた思い出。奈々子はずっと覚えていてくれていたのだろうか？

ハッピーカモーン　16

いかん、自意識過剰だ、と拓也は心の中で呟いた。
そういえば先日…。奈々子が病院に行っており、休暇だった日に浜本くんと話したことを拓也は思い出していた。
拓也と浜本くんはカウンター内で二人、いつものように仕事をしていた。浜本くんはコーヒーカップを丁寧に洗いながら、拓也に話しかけてきた。
「本山さんって、恋人いるんですかねえ」
浜本くんは例のプロデューサー事件を知らないから、素直に聞いたのだろうと拓也は思った。
「どうなんだろう。俺も聞いたことは無いや」
「いや、この前、二人でナツカワベーカリーに行って休憩取っていたときに突然、本山さんの携帯に電話がかかってきたんです。」
「へえ」
「あんまり、他人の電話の内容を話すのもなんですけど…。」と言いながらも、浜本くんは奈々子の会話の内容を教えてくれた。

（ええ、今もまだ病院に入院しているの、だいぶ良くなったから。心配しないで。何処の病院かって？それは言えないわ。お見舞い？私も貴方に会いたいけれど、マスコミに貴方との関係がばれたら、スキャンダルになるし、貴方にも迷惑がかかるわ。とにかく退院したら、連絡するから、それまで待っていて欲しいの）

「きっと、恋人からの電話ですよ。でも有名人ですからね。簡単に会えないんですね。それにしても、本山さんは事情があって、キャスター降板したって言っていましたけど、恋人にも内緒にしなければならない事情って何でしょうねえ」と拭き終わったコーヒーカップを棚に戻しながら、浜本くんは言った。

確かに本気ではないとは言え、プロデューサーと関係があって、怪我をしたとなったとばれたら、恋人とも破局せざるを得ないだろう。だから、それを隠すために奈々子は恋人にも会えずにいるのだろう。

奈々子には恋人がいるんだ…。奈々子は拓也と同じ３７歳とは言え、見た目は３０歳そこそこにしか見えない。下手をすれば、二十代と嘘を言っても通るかもしれない。まだまだ綺麗な奈々子だから恋人がいたとしても自然なことだろう。拓也は少し切ない気分になった。もし願いが叶うのであれば、高校時代に戻って、奈々子への気持ちを伝えたい。

そう思ってから、俺はすでに妻帯者じゃないか、馬鹿なことを、と拓也は自分に言い聞かせた。

ハッピーカモーン　17

桜通りの片側の歩道に水色のシートを敷き、小さな置物を売っている露店があった。ウサギや犬や猫などの動物をかたどった愛らしい小さな置物が所狭しと並べられていた。

奈々子は置物を見つけると「かわいい」としゃがんで、いろいろな置物を手にとって眺めているようだった。

その中で手のひらに2、3体乗るほど小さな黄色や緑色の様々な色をしたブチの招き猫の焼き物が気に入ったようであった。

奈々子の様子に気がついたのか、先ほどまで退屈そうに文庫本を読んでいた若い売り子の女性が

「これは陶器でできているんですよ。職人さんが一つ一つ、色をつけて、同じものは一つもないんですよ」と招き猫の焼き物について説明をした。奈々子はさんざん悩んだ末に、青と赤のブチの招き猫を2つ買い求めた。

「これは今年の桜の思い出に」と拓也に奈々子は笑顔を向けて言った。

「でも何で2つ買ったの？」と拓也は尋ねた。

「1匹だと寂しそうじゃない。それと青は拓也の分。拓也のお店が繁盛しますように。ハッピーカモーン」と奈々子は茶目っ気のある顔をして言った。

「これで商売繁盛、間違いなしだね」と拓也も答えた。

奈々子は店に戻ると、2階のダイニングのサイドテーブルに2体の招き猫を仲良く並べ、

「2匹、仲良くするんだぞ」と招き猫に対して語りかけていた。

ハッピーカモーン　18

奈々子が働くようになってから、1ヶ月も経つと常連客は何かにつけて「本山さん」と彼女を呼ぶようになった。「本山さん、コーヒー、おかわり」「本山さん、お会計」「本山さん、ケチャップある？」「本山さん、砂糖もう一個ちょうだい」というような具合で、「本山さん」は大忙しな人気アルバイト店員になった。もう何年も働いているような、そんな親しさで常連客は彼女に接していた。拓也もそんな様子をほほえましく見守っていた。

そんな彼女に1ヶ月を過ぎた頃から、携帯に電話がちょくちょくかかってくるようになった。彼女は電話が鳴ると、すぐに二階に行ってしまうから電話の内容はわからない。後で拓也が尋ねてみると仕事の復帰の話だと言う。そうだ、彼女は2ヶ月間という限定でこのアルバイトをしている。拓也は少し寂しい気持ちになった。一ヶ月半を過ぎた頃、奈々子は拓也を二階に呼んだ。

「あのね、私には喜ばしいことなんだけど、前の番組に戻れることになったの」と不安げな顔をして奈々子は言った。

「良かったじゃないか？ん、でも、あのけしからんプロデューサーとは問題ないのか？」と拓也は心配して奈々子に尋ねた。

「彼のことは大丈夫。こちらも弁護士をつけて、今後一切、二人きりで会わないって念書を取り付けたから。それで、私の立場が落ちる場合は訴訟に持ち込むことにしたのよ。そしたら、あっさり元の番組に戻ることができたわ」

「君はこの一ヶ月足らずの間にアルバイトをしながら、そんなことも決めていたのかい」

「私じゃなく、プロダクションよ。ここで山本奈々子がつぶれたら、プロダクションも儲からないからね」と奈々子は親指と人差し指でお金のマークを作った。

「それで・・・」
「とうとうお別れか・・・」
「今日相談したいことは違うの、いや、それもあるけど、拓也にお願いがあるのよ」

ハッピーカモーン　19

「何？」
「私、隠していたけど、恋人がいるのよ」と奈々子はそういってから顔を赤らめた。拓也は浜本くんに既に聞かされていたから、特に驚かず「うん」と答えた。
「それも、うんと年下の」
「それで？」
「例の事件のことは彼に話せないし、お見舞いに来るっていう彼を電話で断り続けて、とうとう彼がぶち切れたのよ」
「そりゃあ、そうだろう」と拓也は言った後、「いやいや、相手が山本奈々子であれば、しかたないこともある」と言い直した。
「彼、まだ大学院生なのよ」
「え、そうするといくつなの？」
「今年、２６歳かしら」
「天下の山本奈々子さんの恋人が２６歳の若造だと？」
「まあ、そういうこと。そんな若い男性を好きになるなんて、拓也は驚くかもしれないけど、彼のことは尊敬しているし、本気で愛しているのよ」と奈々子は言った。愛している？１０歳も年下の恋人を？拓也はほんの少しばかり嫉妬の気持ちが心に現れた。
「出会いは？」
「ロボット選手権。２年前の取材で知り合ったの」
「それは随分…、オタクな彼なんだね」と少々、拓也は面食らった。奈々子につりあう相手となると青年実業家か医者か、などと想像していたからだ。
「うん、ロボットに関してはオタクよ。拓也がコーヒーオタクであるようにね」拓也が「オタク」と言ったのが癪に障ったのか、奈々子はそういって、そして続けた。
「彼に会ってほしいのよ。で奈々子は元気でいてもうすぐ会える

からって伝えてほしいの」
拓也は少し考えて答えた。
「俺から一体何て言えばいいんだ？」
「高校の陸上部の同級生で私に頼まれたと言えば、それでかまわないから」
「うーん」と拓也は頭を抱えてしまった。
「あまり考え込まないでよ。何か尋ねられたら、彼女はマスコミに嗅ぎ付けられるのを嫌がっている、とか何とか、適当に答えればいいのよ」と承諾を避ける拓也をはやし立てるように言った。
「そおかあ？」と拓也は生返事をした。
「拓也しか頼める人がいないのよ」と奈々子に上目遣いで頼まれると嫌とは言えない。
「わかった。何とかやってみる、よ」と拓也は頼りなげに答えていた。
「ありがとう」と奈々子は深々と頭を拓也に頭を下げていた。
「え、そんな、頭を上げろよ」と拓也は言ったが、
「本当にありがとう」と奈々子は頭を上げない。
そんなわけで拓也は奈々子の頼みを断わることが出来なくなった。
奈々子はすぐさま恋人に連絡したらしく、拓也は奈々子の恋人と3日後の午後3時にナツカワベーカリーで会うことになった。

ハッピーカモーン　２０

３日後はすぐにやってきた。昼の店の混雑が過ぎ、拓也がほっと一息をついていると、奈々子が目配せをしてきた。店内に掛けられているアナログ時計を見ると、もう2時半を回っていた。拓也はわかったよ、という素振りを見せ、エプロンをはずそうとすると、「待って」と奈々子が声をかけてきた。

「このエプロンが目印だって彼につたえてあるの」と言うので、じゃあ、このままで行くとするか、と拓也はナツカワベーカリーに向かい店を出ようとすると、奈々子は「雨が降るかもしれないから」と拓也に傘を渡した。

店を出ると、雨は降っていなかったが、怪しい雲が空に広がっていた。少しばかり肌寒い。

先日、奈々子と見上げた街路樹の桜はすっかり散り、鮮やかな黄緑色の新緑に覆われており、季節の移り変わりと奈々子との別れを感じさせた。

ナツカワベーカリーはコーヒーショップ・ＴＡＫＵから歩いて５分ほどのところにある。浜本くんは毎日のように通っているが、拓也は月に一回程度行く程度だ。店内に入るとパンのいい匂いが立ちこめてきた。数人の主婦が様々な種類のパンを物色し、トレイに乗せていた。拓也はサンドイッチをトレイに乗せて、入江さんのレジに向かった。

「こんにちは、めずらしいですね」と入江さんは拓也に向かって言った。

「うん、ちょっと、人とここで待ち合わせでね。コーヒーもらえる」

「ええ、コーヒーショップＴＡＫＵのコーヒーには劣りますけど。このサンドイッチは美味しいですよ」と入江さんは言い、コーヒー

を注いでトレイに乗せ「ごゆっくりどうぞ」といつもの接客のマニュアル通りの用語を笑顔で言った。

ハッピーカモーン　２１

ナツカワベーカリーの２階では買ったパンをセルフサービスで食べられるようになっている。店内の掛け時計を見てみると、まだ待ち合わせの３時まで１０分あった。

拓也は一番奥の席に座って、ポケットに忍ばせて持ってきた文庫本を読みだした。読みだしてはみたものの、緊張のせいか文章が頭に入ってこない。奈々子の恋人とはどんな奴なんだろう。２６歳の若造なんて、本気で奈々子は付き合っているのだろうか？

「清水拓也さんですか？」と３時になる５分前に拓也に声をかけてきた若者がいた。若者は白いシャツに黒い細身のジャケットを着ていた。背丈は拓也と同じぐらいであろうか。

「あの、野口啓介です。山本奈々子さんに言われてここに来ました」と彼は落ち着いた声で拓也に話しかけていた。

２６歳と聞いていたが、見た目は２１歳の浜本くんとそう違わない年齢のように感じた。拓也が年をとったからであろうか？彼女と付き合っている青年がこんなに自分とかけ離れた年齢であることに正直、拓也はショックを受けていた。

「ああ、はじめまして、清水です」と拓也は答えた。

「すみません。清水さんにご足労させてしまって」と啓介はまずわびた。

「本当は奈々子さんと直接お話したかったのですが、彼女がどうしても無理だと言うものですから」と言ってからうつむいた。

「私は山本奈々子さんの高校の同級生で、訳あって、彼女から伝言を受け取っています」

拓也は出来るだけ落ち着いた風に声にした。

窓の外でゴロゴロと雷の音が鳴り始め、ザザーッと雨が降り出した。

「雨のようですね」と啓介は呟いた。

「春雷ですね」と拓也は窓に激しく打ちつける雨を見ながら頷いていた。
「奈々子・・・、奈々子さんは元気でいますよ。しかし、あなたに会うことでスキャンダルを恐れております。もう少しで奈々子さんは復帰されますから、それまでもう少し待ってほしいと言っていました。」と拓也は言った。
「僕は奈々子さんのことを本当に愛しています。僕みたいな未熟な人間を相手にしてくれたことを夢のように思っています。親しくなるうちに、彼女も自分のことを愛していると言ってくれました。僕はその言葉を信じて・・・」と啓介は言い、少し黙った。
さらに雨が激しくなり、稲妻が光り、雷鳴がとどろいた。
「彼女の言葉を信じています。今は未熟な学生ですが、将来、彼女を幸せにしたいと思っているんです。だから、今、彼女がどうしているか、本当に心配で・・・」と啓介は目を赤くして拓也に訴えた。
拓也は啓介が奈々子を本当に愛しているのだと本能的に感じた。彼は誠実な人間だ。平凡で未熟な彼だが、何年かすれば立派な青年になり、奈々子を幸せにすることが出来る人間であると拓也は感じた。拓也は奈々子の幸せを心の中で祈った。
「奈々子さんのことは、しっかり、あなたが守ってやってください。・・・少し、強がるところがありますが、優しく見守ってあげれば、きっとうまく行くと思いますよ」と拓也は啓介に伝えた。
「では私は失礼します」と拓也は店を後にした。

ハッピーカモーン　22

外に出ると、先ほどの激しい雨は止み、太陽が雲の合間から、まぶしく輝いていた。
（奈々子、奈々子、幸せになあれ）
拓也は心の中で呟きながら、雨上がりのさわやかな空気を胸に吸い込みながら、店に戻る道をたどっていた。

拓也が店に戻ると浜本くんがあわてた顔で声をかけてきた。
「奈々子さん、急な仕事といって、荷物まとめて、出て行ってしまったんですよ。もう来られないから、店長によろしくって」
「いつ？」拓也は驚いて、浜本くんに尋ねた。
「つい、さっきですよ。今、追いかけたら間に合うかも」
拓也はとっさに店を出て、奈々子を追いかけていた。今思えば高校時代のベストタイムと同じぐらいの速さで走っていたかもしれない。１０分ぐらい走った頃だろうか、大きなボストンバックを持った奈々子の後ろ姿に追いついた。
「奈々子！」
拓也は大きな声で奈々子の名前を呼んだ。
「拓也・・・」と奈々子は拓也の方へ振り返って答えた。
拓也は何も言わず、奈々子に近づき、腰を引き寄せ、唇に触れるか、触れないかの軽いキスをした。
とっさのことで、奈々子は驚いたのだろう。奈々子は手にしていたボストンバックを落とした。
奈々子は何も言わず、拓也の肩に頭を乗せ、離した両手で拓也に抱きついた。拓也もギュッと奈々子を抱きしめた。一分ぐらいの短い間だったと思う。そして二人は離れた。拓也はボストンバックを拾って奈々子に手渡した。
「拓也・・・、ありがとう。急にお別れになっちゃった。ごめん

ね。」

奈々子はそう言うと、拓也に背を向けて、駅の方向に向かって歩いて行った。

拓也は奈々子を黙って見送ることしか出来なかった。

ハッピーカモーン　２３

数週間後、奈々子はテレビの中で２ヶ月前と同じようにニュース原稿を読んでいた。

「やっぱり、山本さんがいなくなると寂しくなりますね」と浜本くんがカウンターで言った。

「平凡なコーヒーショップに戻ったわけだ」

「まあ、そうですけどね」と浜本くんは寂しげに言った。

拓也が休憩のために２階にあがっても、奈々子の笑顔を見ることはできない。もともと世界が違う人だったのだ。突然やってきて、急にいなくなってしまった美しい人。

拓也と浜本くんが雑談をしていると、入江さんが店にやってきた。浜本くんが「いらっしゃい」と言って優しい笑顔を入江さんに向けていた。

浜本くんは最近、入江さんと付き合うようになったそうだ。先日、浜本くんが拓也にとびっきりの笑顔で報告してきたのだ。山本さんのおかげだと何回も繰り返し言っていた。

入江さんは「店長」とカウンターの中の拓也に声をかけた。

「あの昨日、本山さんがお店に来られて。店長にこれをと・・・」と白い封筒を渡した。

「浜本くん、ちょっと、店をよろしく」と告げると、拓也は２階へ急いであがっていった。拓也は封筒を丁寧に開くと奈々子からの手紙が入っていた。見覚えがある美しい文字で書かれていた。

「拓也へ

突然、私を受け入れてくれて、それなのに、急に挨拶もせずに、お店を辞めることになって、ごめんなさい。

２ヶ月の間、本当に楽しかった。浜本くんにもよろしく言っておい

てください。
それと、啓介への伝言をしてくれてありがとう。あれから啓介とも会いました。何とかうまくやっていけそうです。
あの事件があった後、自分が全精力を注いでいた番組も降板となりました。毎日全速力で走っている道が行き止まりとなって、私にも少し考える時間ができました。私はすぐに拓也を思い出しました。拓也に会いたいと思いました。高校時代、私はあなたのことが好きだった。愛とか、恋とか、そんなものだったかわからない。もっと淡い、淡い、純粋な気持ちだったと思います。あなたと今年見た桜は、高校のときに二人で見た桜のように、より鮮やかに美しくみえました。ありがとう。あなたは私の初恋の人。言葉ではうまく言えませんが、啓介はどことなく、あなたに雰囲気がよく似ています。普段のしぐさとか、言い回しとか、一つのことに夢中になるところとか。だから、彼を好きになったのかもしれません。
いつまでも、章子と仲良くお元気で。私もがんばります。また、いつか会える日まで。
PS．コーヒーとても美味しかったです。また変装して突然あらわれるかもね。
山本奈々子」

ハッピーカモーン　２４

人生の行き止まりに、たまたま、このコーヒーショップに立ち寄った奈々子は、新たな道を開拓して、自力で道を進んでいった。拓也はそれを見届けただけに過ぎない。いや、たまたまではなく、手紙に書かれているとおり、奈々子は俺を選んで立ち寄って行ったのだと思いたい。その手伝いが出来ただけでも光栄じゃないか。拓也はそう思った。

ふとサイドテーブルを見ると、青の招き猫が残されていた。もう一体の赤の招き猫は奈々子が持ち去ったのだろう。

「俺も奈々子のことが好きだったよ」と拓也は招き猫を見つめながら呟いていた。愛の告白まで奈々子に先にされちゃったよ。拓也は情けないと思いながらも、自然に目から涙がこぼれていた。

「ハッピーカモーン」

拓也は奈々子が桜の木の下で口にした言葉を自然に声に出していた。

奈々子に幸せが来ますように。

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8917x/

ハッピーカモーン

2011年11月18日02時12分発行